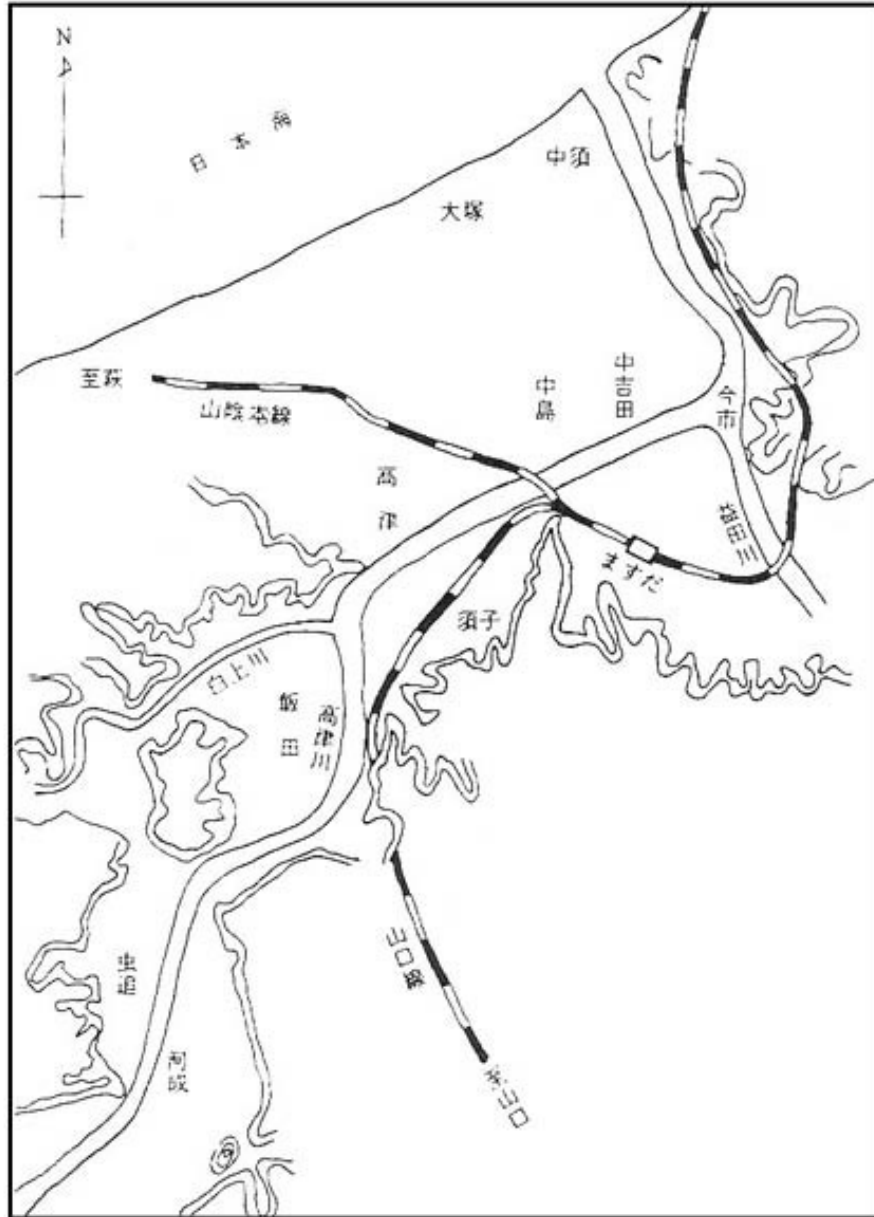


②高津川の変遷について

- 1) 往古高津川は前記の図—1 のとおりで網の目のように流れていたと思われる。
- 2) 慶長年間（1596～1615）



その後の堆積作用により図のようになったものと思われる。

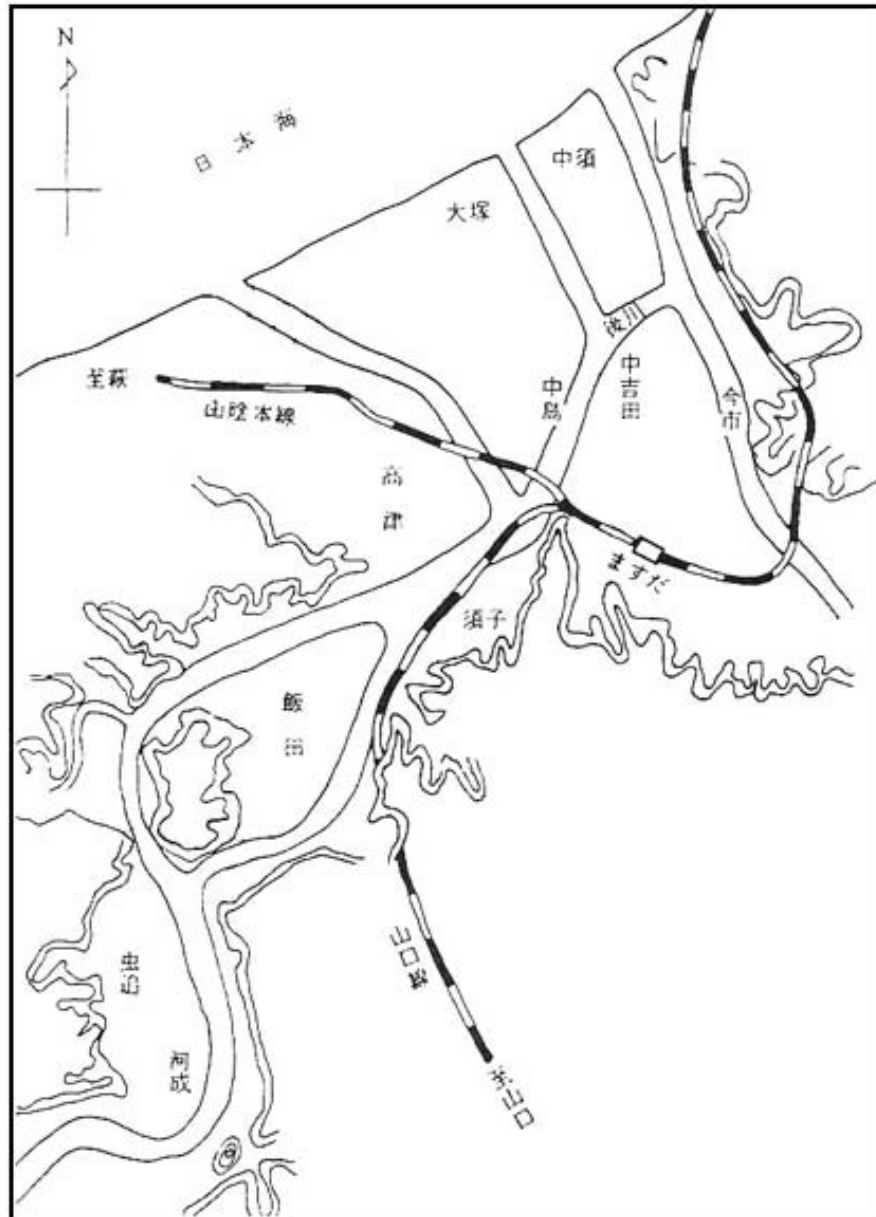
高津川、益田川合流点附近の今市は河港として繁栄していた。

- 3) 元和、寛永年間

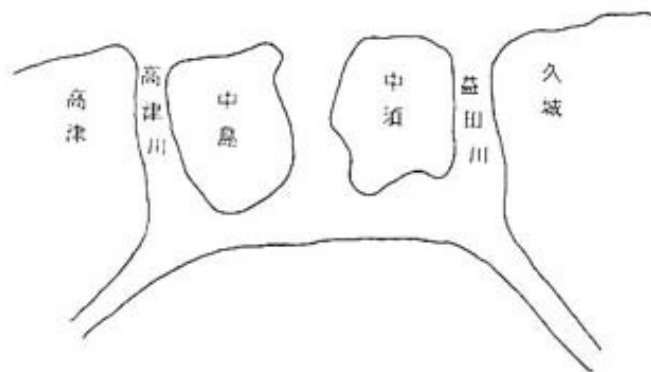
10. 津和野藩における改修の項参照

4) 寛永の16年(1639)

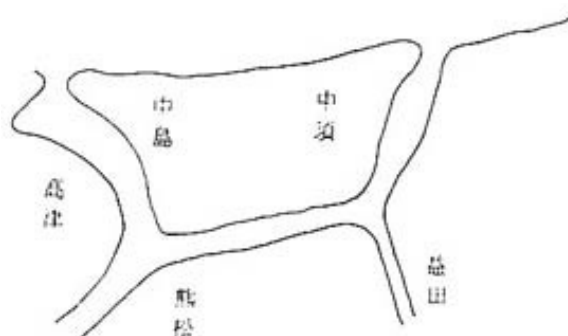
寛永16年5月の洪水で飯田の東側の旧河道へにも流れ須子から益田川に向かって新しい河道を作ったものと推定される。(後川)



5) 元録 14 年 (1702)

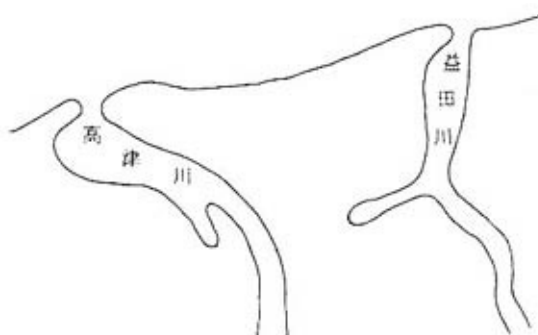


6) 宝暦年間 (1751 ~ 1764)



上記より (元録 14 年) の後の洪水により中島、中須の間の河道は堆積したものと考えられる。(想定)

7) 天明年間 (1781 ~ 1789)



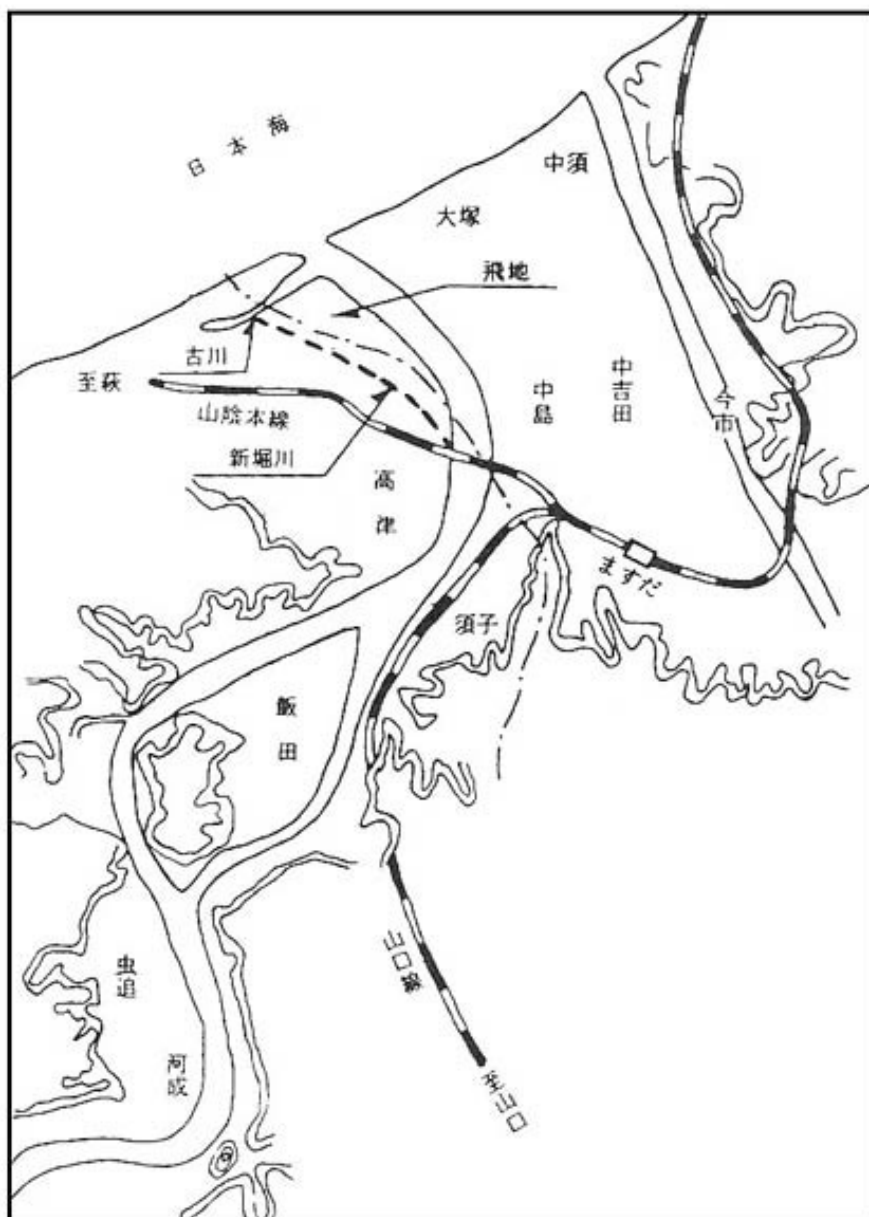
大きな洪水はなく、水流は津和野改修河道に流れ後川には流れず河跡湖化するとともに開発が進んだものと推定される。

8) 寛政年間 (1789 ~ 1801)

寛政元年の洪水により、津和野藩によって開削 (1617) された川筋は一面の川原と化し、僅かにその川口を古川として現今見るような跡を残すに至った。そのため設置された諸施設は水利の便を失ったため新たに名越の対岸から新堀川を掘って水を通じ余水を古川に流し、更に之を新高津川河口につないで水の便を計った。河道が東に寄ったため西側に中の島村の飛地を作った。

寛政7年 (1796) の洪水により新しい河道が外海に通じ、これが今の本流であるが当初の河道は現在のものよりはるかに西に寄っていたが、洪水ごとに更に移動し現在におよんだものである。

寛 政 年 間



以上のことをまとめてみると次のように説明出来る。

慶長年間（1596～1615）当時は④附近を流れており、益田川との合流点、今市は河港として繁栄していた。その後元和3年（1617）の津和野藩による名越の水刃工事や度重なる洪水により⑤のような形路形態に変化したことが予想される。

又天明年間（1780年頃）には水流は津和野改修河道に流れ益田川と河口を別にし、ほぼ現状に近い形態となったが河口は現在より西側に位置し寛政年間（1789～1801）以後洪水の度東方に移動し現在の③に至ったものと推定される。

このように高津川は県下でも最たる洪水害に見舞われる河川であり、土木技術が未熟な時代では大自然のなすがままの状態であったと思われる。現在の益田市街はこれらのことを考慮し安全地帯である右岸の比較的侵蝕保護地に発達していることをみても、大自然の偉力に順応生活を証明していることがわかる。

高津川流路の変遷図

